

巖念寺だより

春彼岸号/令和4(2022)年



題字 大塚婉嬢 書

菅原篤 画

●「ケネス・タナカの仏教教室Ⅶ」始まる
ケネス・タナカ先生(武蔵野大学名誉教授)を講師にお迎えし、内容も新たに第六期仏教入門講座「ケネス・タナカの仏教教室Ⅶ」が四月より始まりです。テーマは「今からはじめる仏教入門」です。昨年度同様、オンライン(ZOOM)にて実施します。どなたでもご参加いただけます。ご関心のある方は是非ともご参加ください。
(巖念寺公式サイト: <https://www.gonnenji.com/>参照)

●『ケネス・タナカの仏教教室Ⅶ』出版!
昨年に巖念寺で実施されたケネス先生の仏教教室第五期目の内容が本になりました。仏教に関心のある方は一読されることをお勧めいたします。

浄土真宗の開祖・親鸞聖人の求めた仏教について、親しみやすく、新しい視点から語られています。初心者でも分かりやすい内容です。
ご希望の方は巖念寺までお申し出ください(無料)。



●ご懇志御礼

昨年末から今年にかけて、次の方々より特別にご懇志を賜りました。心より御礼申し上げます。(順不同)

- 七島意明様/鈴木博久様/武井信也様
- 水戸守美恵子様/山口愛子様/佐藤洋一様
- 江田勇様/西村富美子様/楠節子様
- 新屋静枝様/神敏恵様/須田百合子様
- 五十嵐敏子様/梅本順一様/曾我部清一様
- 浅沼隆様/吉田美佐枝様
- その他



■木目込み人形(作:高旨良子さん)

●ご奉仕・ご奉納御礼

昨年末から今年にかけて次の方々よりご奉納をいただきました。心より御礼申し上げます。(順不同)

- 櫻井忠雄様/川上よし子様/田村洋・恵子様/高旨良子様
- 佐野千代様
- その他

●子ども支援御礼

次の方々から「子どもフードパントリー(困窮する子供を抱えた家庭への支援活動)」へご寄付を賜り誠に有り難うございました。なお、今後も毎月一回のペースで、巖念寺にてフードパントリーを継続してゆく予定です。引き続き皆様からのご支援・ご協力をどうか宜しくお願い申し上げます。
(十二月より一月末現在/順不同)

- 田原福美様/南千津子様/南正成様/下谷晃司様
- 千田尚様/大塚義司様/黒木梅子様/加藤桂子様
- 百目鬼健様/西出朱美様/斎藤明美様/山本喜則様
- 遠藤かほる様/大久保早苗様/佐野千代様/井上健治様
- 西村和夫様/村山紀美子様/水谷修三様/坂上智美様
- 増野裕子様/前澤侑吾・晴代様/佐藤友昭様/小柳幸様
- 富田和子様/平崎宇希子様/山下淑子様/久野佐和様
- 早川美沙子様/倉品武文様/中村治幸様/松下裕也様
- 桑原牧子様/栗本紀美子様/若月倫子様/川口史代様
- 山路桐子様/松本美智子様/勝木尚様/矢作望様
- 白羽玲子様/杉本康治様/田平浩文様/坂亜花里様
- 常田幸子様/妙経寺様/聖徳寺(横井)様
- 分かち合いの会「ひだまり」様
- おいもやさん興伸様/いわずな書店様
- 東京文化ライオンズクラブ様/榊朋園様
- ㈱ロージィブルー様/㈱田原屋様
- その他(匿名多数)

●春彼岸のお知らせ

春のお彼岸は三月十八日(金)から二十四日(木)までの一週間です。今年も「花まつり(四月八日)」に先がけて、お釈迦様の誕生仏を安置しております。どうぞ誕生仏に「甘茶」をかけてお参りください。

また、二十一日(月)・春分の日はお中日(ちゅうにち)といって、お彼岸の中心になる日です。当日は午前十一時から本堂にて彼岸法要をお勤めいたします。その際にご希望の方はお位牌・過去帖などをご持参ください。ご一緒にお参りいたしましょう。

●コロナ禍につき、なるべく混雑を避けてご参詣ください。そして、コロナウィルスの影響で墓参をやむなく控えている人のために、代わって住職がお彼岸期間中に墓前に生花とお線香を供えての「墓前読経」を承っております。ご希望の方はお寺までご依頼ください。
●三月十九日(土)の午前九時半頃から、ひばりが丘の墓地での墓前読経をうけたまわります。ご希望の方はお早めにご連絡下さい。
(電話:03-3844-9383)

●ご参詣の際には巖念寺オリジナルの「仏教おみくじ」を試しに引いてみてください(無料)。
お彼岸という節目を私たちにとって大切なひと時にいたしましょう。合掌



■仏教おみくじ



巖念寺 〒111-0042 東京都台東区寿1-11-2
<http://www.gonnenji.com>



電話: 03-3844-9383 FAX: 03-3844-9393
E-mail: gonnenji1253@gmail.com

供養の場が問いかけてくるもの

と「死」を奪っていくのか。祖母の死を悲しむことができる日はいつになるだろうか

年明け早々、トンガの海底火山大噴火、オミクロン株の感染拡大、緊迫する世界情勢と日々、落ち着かないニュースが飛び込んできます。皆様、いかがお過ごしでしょうか。私は月に一回、国会図書館で日本全国の地方新聞に目を通すことを習慣としていますが、昨年、ある投書に目がとまりました。「『石手日報』八月四日付の投書欄「声」で、三十三歳の公務員女性による投稿です。題名は「実感できない祖母との別れ」。少し要約してご紹介しましょう。

《祖母が亡くなったと知った。関東に住む祖母とはもう二年近く会っていなかった。

感染予防のため、葬儀には参列しないことにした。「葬儀は不要不急じゃないのよ」と多くの人に言われたけれど、断った。

感染症は、大切な人の命を奪っていった。でも、もっと恐ろしいのは、感染症は「死」をも奪っていくことだと感じた。私は今、悲しみを実感できていない。知らせを受け、駆けつけ、冷たくかたまった身体を見て、ひつぎに宝物を詰め込んで、お経を聞いて、初めて「死」は心の中に入り込んでくる。人が死んだら、生き残った人たちでその人の生きてきた証しを敬い、ここにいないと悲しみ、心を痛め、前を向いてまた生きていく。そんな一連の「死」もできなくなってしまった。このまま感染症は、たくさんの方の「生」

仏教の窓

祖母の横に布団を並べて、寝ました。祖母の顔を見ながら、今まで大事にしてもらったことを思い出し、後からあとから涙があふれてきました。

葬儀当日、仏壇（仏壇のある部屋）で白い経帷子を着せられていく姿を、親族で見守りました。ついに足袋を着けた時に叔父の奥さんが嗚咽し、部屋を走り出ていきました。あとで、「実家の母よりも、長く一緒に過ごしたからなあ」と涙をふいていました。

葬儀会場には二百人近い会葬があり、喪主である叔父が、挨拶をしました。母は昨年病気であったこと、でも家族としては欲が出て、八十九歳まで来たのだから、次は九十歳までと願っていた——、というところで声がつまり、うつむきました。

峠を越えてゆく火葬場は、子どもの頃に、従兄弟たちとはしゃぎながら向かった海水浴場へと続く道でした。茶毘にふされ、空にななびく煙を指さし、従兄弟が「大きなおばあちゃんがお空に行くで」と、幼な子に話しかけていました。菩提寺の副住職と親族皆でお齋（食事）をいただき、笑ったり泣いたりして、こうして祖母のお弔いは終わりました。

供養の場が問いかけてくるもの

十二年も前のことなのに、妙に細部まで鮮明に覚えているなど自分でも思うのですが、それは振り返ると、私はあの三日間、祖母の「死」に向き合っていたけれど、悲しいばかりでなく、そこにぬくもりを感じていたからではないかと思うのです。私以外の人から知る祖母の日常、祖母への思い……。非日常の空間において、人がかかわりあうなかで、互

奪われたものは何か？

実は昨年を通して、どの地方紙の投書欄にも共通して見られたのが、この「コロナと葬儀」にかかわるものでした。「高齢で参列を控えた」「身内だけで済ませた」……。

とくに一時は感染者の少なかった地方ほど、葬儀を取り巻く状況は厳しかったようで、東北地方の寺院住職である私の友人は、「東京に住む息子が、親の葬儀であるのに周囲の目を気にした親族からの強い反対を受けて参列させてもらえなかったり、関東から来た親族は斎場に入るのを遠慮してほしい、ということもあった」と嘆いていました。

前述の投書の女性も、岩手で、それも公務員という立場上、地元に戻ってからのことを考え、参列を控えたのでしょうか。

でも何となく、この投書は他の類似の投書と異なり、妙に気になりました。冷え固まった心がむき出しにされたような、そんな落ち着かなさを覚えるのです。

いったい、この人は「何が」奪われたのだろうか。そう考えているうちに、私の祖母のお弔いのことを思い出しました。

通夜二日間の祖母の葬儀のこと

母方の祖母は十二年前、紅葉のきれいな秋の日に、自宅で亡くなりました。前日から、もう長くないという話を聞いていたのですが、従兄

冒頭の投書の女性は亡き人の存在を確かめる、ぬくもりの場を十分に持てなかったから冷たく固まっているのかもしれないと思ってしまう。

本来、仏事供養は悲嘆からの回復のシステムに沿って設けられた側面があるといわれます。悲しみ新たな時の通夜葬儀は大勢が集まり、皆で支えあう。そこから一般に納骨の区切りとされる四十九日法要までは（今は効率重視なのか、葬儀の中に「初七日」も組み込まれる奇妙な流行がありますが）、初七日、二七日、三七日……と七日ごとの小刻みに自宅でお経をあげる供養の日取りが設けられ、地域によっては近所の人も集まって御誂歌を唱える。あの世の行き先が決まるといわれる四十九日に納骨し、続く百箇日法要が別名「卒哭忌」（悲しみから離れる供養）と呼ばれるのは、涙の海から立ち上がる一歩を踏み出せるかもしれないという頃。初めて迎えるお盆は特別で「初盆」と呼ばれ、お坊さんやお参りに来たり、地元の人が初盆の家先で供養の獅子舞を踊る地域もあります。やがて一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌、十七回忌、二十三回忌、二十七回忌……と次第に間隔は開くものの、何十年も供養の機会が設けられていきます。

なぜ先人は、こうした法事の決めごとを作ったのか。思うに亡き人を通して、本当に生きることへの励ましを得る機会でもあったのかもしれない。

仏教は「諸行無常」（一切のものは変化する）

弟から届いた訃報メールに、お祖母ちゃんだった私は受け止めきれず、しばらく、ぼーっと立っていたことを覚えていますが。

両親と車で日本海側にある祖母の家に向かいました。家に着くと、いつも寝起きしていた離れに祖母は横たわっていて、その姿に母と伯母が、「お母ちゃん！」と叫んで泣き出しました。

しばらくして、長男である叔父の奥さんが、「実はまだお医者さんが来てへんねやわ」と困惑した表情で話しました。地元のかかりつけ医が、ゴルフか何かに出かけて連絡がつかないというのです。それでも、ほどなく到着したお医者さんは、臨終時刻をはかるために「ごそしておられたのですが、よほど慌てて来られたのでしょうか。襟首からクリーニングのタグが飛び出ていました。全員の視線がその襟首に向かい、それを伝えようとした母の手を、叔母がそっと押さえました。

やがて枕経（亡くなった時にあげるお経）に菩提寺の住職が来られ、「こないだまで、お元氣やったのになあ」とお経をあげました。夕方になって、近所のおばあさんが転がりこむように家に入ってきて「知らなかったあー」と泣き出しました。従兄弟から、祖母と仲の良かった友達だと聞かされました。

葬儀社の手違いで、通夜を自宅で二日行うことになり、近所の人の出入りも続くなか、従兄弟の奥さんは集まった大勢の親族のために、ちらし寿司をせっせと作っていました。夜になると、私は



を説きます。「私」も「私の思い」を構成する縁も変化し続けていきます。今は立ち上がれないような苦しみも、ふとしたきっかけで和らぐことが起きるかもしれません。「くそ親父が。死んでせいせいした」と怒っていた人も、時が経つうちに、「親父は実はこう考えていたのかも」と思える縁に出会うかもしれません。

仏様の前での変わらぬ仏事を重ねながら、つながりのなかで変わっていく一切に気づいた時、そう感じられたこの一瞬、このわたしがいとおしく思えるのではないのでしょうか。その時、亡き人は遠くへ行ってしまったのではなく、実はあなたと共に歩んでくれたのではなく、実はあなたと共に歩んでくれたと知ることができるとは思っています。これを「還相回向」（阿弥陀仏のはたらきによって、先に極楽往生した人が、現世で生きる人を導くこと）といい、連綿と続くいのちのリレーのなかで、かけがえのない尊いわたしを本当に生きていく道が始まります。

投書の女性も、そんな供養の機会を通して、いつの日か亡き人と共に歩む自分を感じることでできればいいなと願っています。まもなく春のお彼岸です。仏様の前で、皆様も、ゆつくりと心の対話をしてください。

（新坊守・ちひろ）
合掌

